

# 日本橋と村野藤吾を語る

**藤森照信** (建築家・建築史家・東京大学名誉教授)

**陣内秀信** (建築史家・法政大学特任教授)

対談＝藤森照信×陣内秀信×松隈洋(建築史家・京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授)

[日時] 2019年3月31日(日) 14:00～16:30

[会場] 高島屋グループ本社ビル8階ホール

人気の建築史家二人が語る、日本橋と高島屋の建築。江戸・東京のリサーチを重ね、その成り立ちをいつも興味深いストーリーで伝えている陣内秀信氏が、まずは日本橋に焦点を当てて秘められた構造を見せてくれます。つづけて、建築文化への広い視野をもちながら、工法、様式、建築家にいたるまで深掘りしてゆく姿勢に誰もが引き込まれる藤森照信氏が、日本橋高島屋で気づいた新発見を語ります。



藤森照信 (ふじもり てるのぶ) / 建築史家・東京大学名誉教授・東京都江戸東京博物館館長

1946年長野県生まれ。1971年東北大学工学部建築学科卒業。その後東京大学大学院へ進学、村松貞次郎に師事し近代日本建築史を研究した。1991年には神長官守矢史料館で建築家としてデビュー。1998-2010年には東京大学生産技術研究所教授、2010-2014年には工学院大学教授を務め、2016年に東京都江戸東京博物館館長へ就任し現在に至る。主な著書に『日本の近代建築(上下)』(岩波書店、1993年)、『フジモリ式建築入門』(筑摩書房、2011年)など、また主な作品に「タンポポ・ハウス」(1995年)、「高過庵」(2004年)、「ねむの木こども美術館 どんぐり」(2006年)など多数。

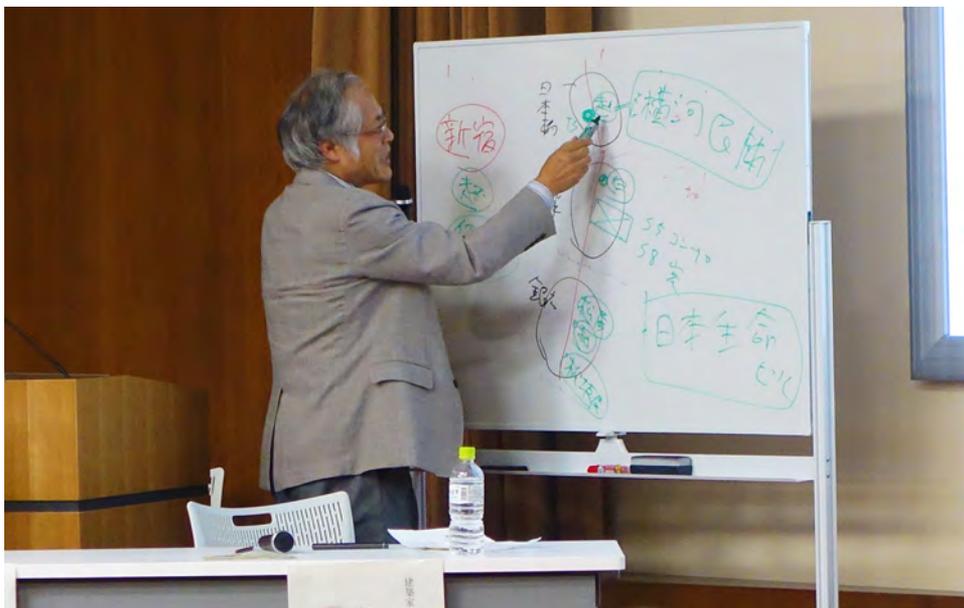


陣内秀信 (じんない ひでのぶ) / 建築史家・法政大学特任教授

1947年福岡県生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。法政大学工学部建築学科専任講師就任後、助教授、教授を経て、デザイン工学部教授に就任。2018年に退任、現在に至る。主な著書に『東京の空間人類学』(筑摩書房、1985年)、『南イタリアへ! ——地中海都市と文化の旅』(講談社、1999年)、『迷宮都市ヴェネツィアを歩く』(角川書店、2004年)、『イタリア海洋都市の精神 ——興亡の世界史』(講談社、2008年)、『イタリア——小さなまちの底力』(講談社、2004年)など多数。1985年に『東京の空間人類学』でサントリー学芸賞(社会・風俗部門)を受賞。

# 東洋趣味を発見した日本橋高島屋

藤森照信



## 最初の地価はどうやって決めた？

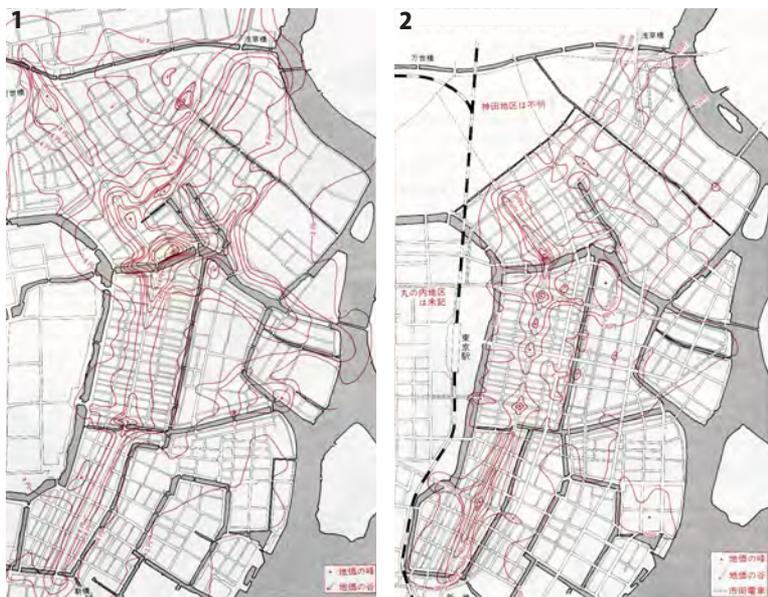
明治以降、日本橋がどうなっていったのかをもう少し科学的に、「地価」で見ようと思います。地価は、国土交通省が公式調査をずっとやっていますが、近代的な調査が始まったのは東京では1878（明治11）年。1873（明治6）年の地租改正に端を発します。地租改正とは明治政府が税金を全国統一にしようとした改革です。それまで税金は藩が徴収していて、江戸にもさまざまな税金があった。たとえば多くの場合は間口の広さに応じて徴収していたと言われています。間口で決まるので、面積は関係ありません。間口が狭いほうが安い。このように慣習的に非常に変な徴収の仕方をしていました。もう一つ、農地と町人の土地というのはそれぞれ管理が別で、藩によって適宜徴収していました。そういうことをすべてクリアにして、税金を統一する。農地であろうが工場であろうが町の土地であろうが、すべての税金を統一した革命を地租改正といいます。

地租というのは、要するに税金を基本的には土地から取るということです。当時最大の税金の源は土地でしたから、それを全国で統一します。これは膨大な労力をかけて進められました。まずは土地一筆一筆の面積を確定しなくてはなりません。それは現地に行って測ればいいのですが、一番大変なのは持ち主を確認することです。江戸は比較的持ち主がはっきりしていました。地図がつくられて、沽券といういわば土地の価値を示した権利証があったのですが、維新後明確な持ち主がわからない曖昧な共有地がたくさん出てきます。また、田舎だとまだ土地は正確に測られていない。慣習的にここは誰々さんのもの、という区分の仕方でした。それを、全部の土地を測って持ち主を確定したんです。これはもう大変なことで、東京では1878（明治11）年にすべての土地の持ち主と面積を確定しました。その後も全国で同様の調査を行っていて、私の出身地である長野県では1889（明

治22)年に村のなかのすべての土地が測定されました。そこで初めて、日本の土地の実態が具体的に把握されました。

その際、東京ではどうやって土地を値付けしたかということ、その方法がもの凄く面白い。まず初めに政府は、東京の不動産屋を集めるんです。当時の制度的には不動産屋は商売としては認められていませんでしたが、実際には沽券の売買がありましたから、そういうことを生業としていた人たちがいました。そこでその人たちを集めてこうたずねます。「東京で一番地価が高いのはどこか」。そうすると全員が「魚河岸です」と答えるわけです。

実際どのように地価を決めていったかということ、まずは土地を区単位で分けていきます。当時の不動産屋たちの意見をまとめた結果、日本橋の通りと日本橋川が交差する辺りの一角に、日本で一番高い地価が設定されます。ここで生まれたのが「一等地」という言葉です。そして、次に決めるのが区の境の地価です。彼らは普段から取引をしているので大体知っているんですね。それで、この土地は十五等にしよう、こっちは土地は十三等にしようというように、一等地を中心に、その周辺の地価を決めていきます。ここからが面白いところで、たとえば一等地から十五等地までつながる通りを十五等分して、一筆ごとの地価を決めていくんです。その実測図は今でも残っています。一等地の坪単価を基準に各等級が振り分けられた土地の価格を設定して、その後、その価格を公表するんです。「あなたの土地は〇〇円だから、税金は〇〇円です。」と。その後どうなったかということ、「俺の土地はそんなに高くない！」というように、当然不満が出ますよね。そうすると、政府はこれを競売にかける。そもそも不動産屋たちはその土地が大体いくらくらいなのか知っているわけです。だけど自分の土地はそんなに高くないと主張する人がいます、税金を払わなくてはいけないから。ただ、競売にかけるとなれば、必ず本人が落とすんです(笑)。そういうことを二度三度やっていくうちに、誰も文句を言わなくなる。実際は政府が決めたというより、不動産屋が七人くらい集められて決めた価格らしいですが、そんな価格でも最終的には全部納得を得るわけです。ですから、日本では土地の所有権というものは一応あるんですけど、このような方法で、日本全土の税金を決定しました。



1.1878(明治11)年の東京地価等高線地図。地価は坪当り、等高線は2円単位。

2.1933(昭和8)年の東京地価等高線地図。地価は坪当り、等高線は10円単位。

地形図の解読と同じようにして、都市の様々な動勢を読みとることができる

## 地価は土地の体温

その時つくられた地図がわずかに残っていて、僕は二点見たことがあります。一つは東京都、もう一つは国の公文書館が所蔵しています。他では見たことがないんですが、それらの地図はなんと、エッチングで銅板に一筆ごとの区分けと等級が全部描かれていた。それで、これを使えば地価の地図が、つまり等高線が描けることに気づきました。ただもの凄く面倒くさくて、地価というのは自然の等高線と違ってばらつきがあります。たとえば街区の内側にあるような土地は安いわけです。それらをすべて勘案していてもキリが無いので、街区の角の地価を出して四街区に囲まれた交差点の地価をその平均値とする。そうして辻々の平均地価を出して、それをつないでいくと等高線ができるわけです。

そうやって私がつくった地図の一つが 1878 (明治 11) 年の東京地価等高線地図です。当時の東京に加えられた変化は、銀座のレンガ街と〈新橋停車場〉。おそらくそれ以外は江戸の地価のままだろうと思います。日本橋魚河岸が一等。そしてその少し北西側に三越があります。陣内さんが言われたように、地価が高いのは水運と橋の交点なんです。三越が建っているあたりも高いんですが、それでも圧倒的に魚河岸のほうが高いんです。そこから富士山のようにどんどん周辺に向かって地価が下がっていく。ただ下がり方に特徴があって、江戸の大動脈と言える大きな二本の通りに沿って下がっていくんです。それから魚河岸の辺りは水路に沿って下がっていく。でも全体としては単純なかたちをしていたわけです。ただこの地図を見ていると、今話した法則に乗っ取らない山や谷があります。これらも、ちゃんと調べれば何か理由があるんだと思います。

実はこの地価等高線は現代版もつくることができます。公表はできないと思うけど (笑)。路線価が日本一の銀座・鳩居堂の地価だけは毎年公表されますが、通常は公開されていない、調べることも困難な地価が、関東大震災復興の後に二回だけ、1878 (明治 11) 年と 1933 (昭和 8) 年に公開されます。ものすごく巨大な帳簿のようなかたちで公開されていて、国会図書館に行くと見ることができます。歴史を調べていると、たとえば「銀座が日本橋を抜いた」とよく記述されている。でも抜いたのがいつかは誰も厳密に答えられない。今でも渋谷が最近盛り上がっているとか、先ほど陣内さんも日本橋のあたりが復活していると言っていました。そんな地域の勢力を客観的に示す方法はないかとずっと考えてきました。今は、結局地価がそれにあたるんじゃないかと思っています。土地の体温みたいなものですね。場所の要件、都市活動の内容、そういういろんなことが総合して出てくるのが地価ではないかと考えています。ですから地価は非常に興味深い。

1933 (昭和 8) 年の情報をもとにつくった東京地価等高線地図を見ると、地価の高いエリアは圧倒的に銀座に移ってしまう。そして伝馬町通り、奥州街道の山は消滅しています。1878 (明治 11) 年の地価等高線は頂上が日本橋魚河岸にあって、そこから中央通りや水路などいろんな方向へ尾根が伸びていました。1933 年にはそれが消えて中央通りが一本の尾根になり、そして中心が銀座になる。また、1878 年の等高線を見ると橋と橋の袂というのは荷揚げの場所で都市の中心になっていくんですけれども、1933 年には消滅しています。その代わりに、通りに沿ってぼこぼこ山ができています。何かと調べてみると、市街電車の交差点で駐車場がありました。当時の市電はこういう価値を持っていたわけです。この 1933 年は、ちょうど〈日本橋高島屋〉が建設された年でした。

## 体温の高い土地に最後に進出した高島屋

日本橋に出てくる以前の高島屋は、三階建ての木造だったそうです。木造三階建てで近代的なデパートだと認知してもらうのはやはり難しいので、今の場所へ出てきて立派な建物をつくるわけですが、おそらく相当な決意をしたんじゃないかと思います。当時、震災後のデパート分布を調べると、なんといっても日本のデパートの元祖である三越が日本橋にあるわけです。この三越が今のかたちになるのが1914(大正3)年。で、そこから少し南東に下った京橋あたりに白木屋がある。さらに下った銀座が当時栄えていましたから、そこにもデパートがどんどん出てきます。銀座には三越銀座店があって、その付近に松屋や松坂屋ができる。もう一つ忘れてはならないのは新宿で、日本橋とは別の新興勢力として伸びてきていました。新宿には三越と伊勢丹ができます。震災復興の時代に各社がデパートをどんどん開店するなか、その最後に登場したのが高島屋です。高島屋はそれらのデパート群から少し外れた南伝馬町に木造三階建ての建物を構えていましたが、それではいかんということで、今の位置に出てくるわけです。1930(昭和5)年にコンペをして、1933(昭和8)年に完成しました。

ここで不思議なのは、当時の高島屋の記録をみると、日本生命ビルのコンペであると書いてある。これはおそらく高島屋の資力だけでは、三越や白木屋が立ち並ぶエリアにいきなり飛び込むというのは難しかったんだろうと思います。それで日本生命と組むかたちで日本橋に高島屋が出てくる。この建物は当時、日本生命の東京店と高島屋百貨店の二つが入っていました。もうひとつ大事なものは、この東京のデパート合戦の最後に登場したのが高島屋だったということ。高島屋を最後にもうデパートがつくられなくなります。というのも、時代は太平洋戦争目前。それどころではなくなってきたんです。

高島屋にとっては首都で本格的に勝負をかけたのがこの日本橋店になるわけで、そういう意味では非常に大事なものだったわけです。そのことがあって、ちゃんとした建築をつくらなきゃいけないという意識があったんだと思います。当時こういう商売は、建築がちゃんとしているかというのがとても重要でした。たとえば三越は、横河民輔がつくった。横河は、今では横河電気のほうが有名で、あんまり建築家だと思われていないかもしれないですけど建築家です。白木屋は石本喜久治で、伊勢丹は曾禰中條事務所、というように当時の一流建築家が設計しています。おそらく高島屋は、他の百貨店に負けない建物をつくらうと決意したに違いありません。そこで、コンペをやるわけです。

実を言うと、まさか高橋貞太郎の建築のことをしゃべる日が来るとは思っていませんでした。高橋の作品だと、私の頭にまず浮かぶのは〈川奈ホテル〉。ゴルフ場のあるスパニッシュ風の大変素晴らしいホテルです。それから当然のように〈学士会館〉ですよね。その二つはそれなりに調べたこともあったんですけども、高島屋についてはちゃんと調べたことはなかった。ただ村野藤吾には関心がありまして、本を読んだり図面を見たりいろいろしていくうちに、高島屋についてちゃんと見なくちゃいけないと思っていました。我々歴史家が建築をちゃんとみるというときには、一つひとつのつくりを検討して、つぶさに見るんです。今回改めて、日本橋高島屋を見てまわりました。

## 日本の西洋建築のルーツ

改めて見てびっくりしました。このような外観のことを当時は近世復興式なんて呼んだのですが、大まかに言えばイタリアのネオ・ルネサンスの流れのものです。この様式の基本は三層構成と言われていて、立面を水平に三分割します。なぜ三分割したかと言うといろいろな事情がありますが、とにかく層にして分けるのがルネサンスの基本です。それからもう一つ、この様式では一般的に窓を縦長に三つに割るんです。ただ高橋貞太郎がイタリアの建物を調べてやっていたかと言うとそうではなくて、当時こういう歴史主義、歴史的なものを手本として設計していた国はアメリカなんです。当時はフランスのエコール・デ・ボザールという学校が一番進んだ研究をしていて、ボザールがアメリカに影響を与えました。そのため、アメリカンボザールというような言い方がされています。どの国よりも本気で歴史主義をやっていたのはアメリカだったんです。それだけアメリカが遅れていたとも言えるんですが。ですから、当時日本でこういう歴史主義をやる人たちというのは、基本的にアメリカに学びました。これは、明治時代に片山東熊が〈赤坂離宮〉をつくった時からそうです。彼らは一生懸命ウィーンやイギリス、バッキンガム、それからフランスの宮廷建築を観に行きます。さんざん勉強しますが、図面ができてからそれをちゃんとチェックできる人がヨーロッパにいません。ヨーロッパでは王様が王宮をつくるような時代はとっくに終わっていました。明治の末ですからアールヌーヴォーというのが出てきて、元気のいい連中は歴史的なものを否定する方向へ走り始めていたのです。片山さんは困ってアメリカへ行って、アメリカの建築家に見てもらいます。アメリカには、ヨーロッパの王宮のデザイン様式で現役のオフィスビルをつくっている人たちがいました。そういう人たちが、歴史主義をちゃんとやっていた。そこで片山は、ここがおかしいなどと言われて直してもらっています。

それと同じことが昭和初期にもありました。当時、歴史主義を最も高いレベルでやっていたのは渡辺節。もう一人、岡田信一郎という人がいて、彼は大阪の高島屋を設計しています。ただ、東京の高島屋を建てるころには岡田はすでに病気を患っていたように記憶しています。ですから、当時一番の名人は渡辺節。その下でやっていたのが村野藤吾なんです。渡辺もヨーロッパには行っていません。ヨーロッパはつまらないものばかりつくっていると、興味がありません。それでアメリカに行って、マッキム・ミード&ホワイトと言った、アメリカで歴史主義をやっていた人たちの建築を見て彼は帰ってくる。村野も同様です。ですから基本的にはアメリカを手本にした時代の歴史主義です。



高橋貞太郎、村野藤吾（増築部分）〈日本橋高島屋（旧東京日本生命館）〉1933年・1951-1965年（増築部分）、東京都中央区

## 東洋趣味をコンペの条件に入れた伊東忠太

一番興味を惹かれたのは、コンペの時に「東洋趣味」という文言をはっきり掲げていることです。コンペの要綱の最初に書いてありますが、これがなかなか面白い問題をはらんでいます。「日本趣味」、あるいは「伝統」と呼ばれる、日本の伝統的なデザインをどう扱うかについては、これまでも日本の建築家たちがずっと問題にしている、いろいろな形で論じられてきました。その中心にいたのが日本橋高島屋のコンペ審査委員長を担当した伊東忠太。ただ、彼が考えていたのは日本趣味ではなく、東洋趣味です。簡単に言うと、日本が中心になってアジアの近代化をリードしようという思想です。八紘<sup>はっこういちゅう</sup>一宇や大東亜共栄圏がこの時期からど次第に出始める。ですからここでいう東洋というのは、日本趣味の話ではありません。

辰野金吾は 1877(明治 10)年に留学するわけですがけれども、留学先の先生から「お前の国の建築の話をしてくれ」と言われた時に、京都の本願寺や日光の東照宮といった観光名所しか思い出せなかった。そこで自分は日本の建築のことを何も知らない、もの凄く恥ずかしい思いをするわけです。その後帰国すると、伊東忠太に「お前は日本建築のデザインをするんじゃないくて、歴史を調べろ」ということを言われて、のちに初めて〈法隆寺〉を発見します。それ以降ずっといろんな古いものを発見していくわけですがけれども、それらから見出される伝統、それが日本趣味なわけです。それをどう考えるかというのは、当時のいろんな議論がありますけれども、おおよその展開として、大体日本の伝統をいかに近代のなかで生かしていくかという意識が生じてくるわけです。これが日本趣味ですが、東洋趣味はこれとは違うんです。

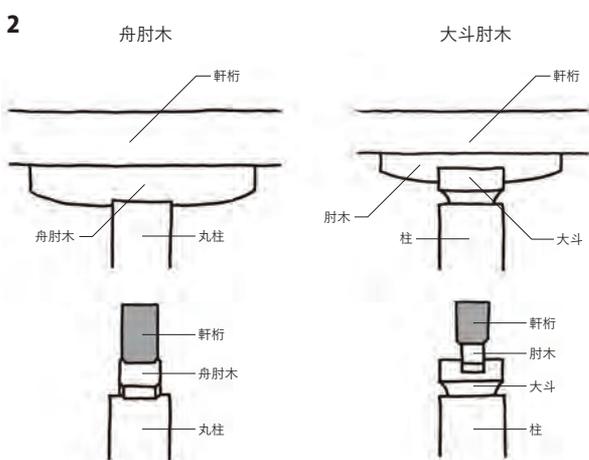
東洋というのは明らかに大東亜共栄圏と重なっていて、具体的には中国とインドが念頭に挙がるものです。東洋は、ヨーロッパの側から見るとイスラム圏・インド・中国・日本のことで、日本の側からはイスラムまではあまり念頭に置いていなかったんじゃないかと思うんですけれど、そうでもなかったという説もあります。代々木に〈東京ジャーミイ〉と呼ばれる日本最初のイスラム寺院があります。これは戦前に建てられたもの凄く立派なモスクですが、どこがお金を出したかという、軍が満鉄に言って、満鉄がお金を出した。当時の記録によると、将来必ずヨーロッパとイスラムの土地を巡った争奪戦が始まると。そのためには早いうちにイスラム勢力と仲良くしなくてはいけない。イスラム勢力と仲良くするためにはモスクが必要ということで、満鉄がお金を出して、あの立派な建物を突然つくったんです。イスラムとの関係もある程度本気で考えていた可能性もありますが、ちょっと誇大妄想かもしれません。それで、大東亜共栄圏は明らかに中国とインドを意識しています。ただおそらく中国と日本の建築は、非常に近いんです。なぜかという、当たり前ですが、日本の寺院建築というのは飛鳥時代からずっと中国の影響を受けてきました。ですから「東洋趣味」が中国を指すというのは考えにくい。この高島屋のコンペは審査委員長が伊東忠太ですので、おそらくこれは伊東忠太がつけた言葉だろうと思います。

それともう一つ、この審査員の顔ぶれが非常に面白い。まず伊東忠太がボスで、京都大学の建築学科をつくった武田五一の名前が二番目に書いてありました。それから早稲田大学の建築科をつくった佐藤功一。そして、片岡安と塚本靖。私たち建築史家は、こういう顔ぶれをみると誰が中心でやったのか大体わかります。

まず片岡安は、デザインにはあまり関心のない方。最後は大阪市長になって、政治家になります。なぜここに入っていたかという、日本生命の息子なんです。片岡家としては彼に家業を継いでほしかった。けど「俺は嫌だ」と言って一応最後まで建築事務所はやる。辰野金吾というのは面白い人で、大阪に辰野片岡、東京に辰野葛西という二つの事務所をもっていました。パートナーの選び方は非常に明快で、とにかく事務所がつぶれないだけの資力を持っている弟子と組む(笑)。というのも、当時は建築家にお金を払うという習慣があまり無かったので、辰野自身、事務所の経営が非常に大変だった。そのなかでもちゃんとやらなくてはいけなくて、〈東京駅〉の設計が決まった時、当時辰野事務所があった丸の内の通りを、万歳しながら辰野が帰ってきたという話もあります。それくらいになかなか大変だったようです。辰野は自分とコンビを組む相手を弟子のなかから選ぶんですけれども、一人は葛西萬司という盛岡の大地主で、もう一人の片岡安は、細野と言うのが本名です。だけど、片岡家に養子に入る。片岡家というのが日本生命を創設した家で、彼のお父さんは大蔵大臣も務めます。だから片岡が審査員に入るのは当然のことで、ただ彼はデザインに興味はないんですよね。最後の塚本靖は、ほとんど建築の設計をしなかった方。何をしていたかというデザインが好きで、よく三越とか高島屋がやる洋服の催しなどをやっていました。ですから、審査員のなかでちゃんとした建築家というのは伊東、武田、佐藤の三人です。この三人は割と仲が良く、私の見るところでは、具体的に何かやるときにはおそらく佐藤が、まあいいよ、いいよと肯定する。武田は、実は伊東とは特殊な共通点があって、東洋趣味をもっていたんです。この場合の「東洋」というのは、実はインドのことを指していたのではないかと、というのが私の説でございます。突然インドと言われてもピンとこないかもしれませんが、先ほど述べたように、当時は建物全体を東洋風にはしないんです。こういうビルの場合、多くはディテールでそれを出す。実際に特徴的な事例を見ていきます。

## 日本橋高島屋に見る東洋趣味の痕跡

まずは軒です。少し和風な軒があります。当時の図面を見ると、当初は屋根をかけようとしていたのをやめたようです。柱と梁の接合部分は、ヨーロッパの建築だとちゃんとしたキャピタル(柱頭)でできていますが、日本橋高島屋の接合部分はおそらくお寺のディテールです。これは「大斗<sup>だいとひじき</sup>肘木」と言います。大斗というのは柱の上の四角い、碁盤みたいなもの。大斗の上に乗るようにして、横に出てきているものがある。これを「肘木」と言います。大斗肘木というのは、日本の寺院に使われるものです。法隆寺なんかはもうちょっと複雑な組木をやっていますけれど、柱の上に斗を載せず肘木だけで梁を受けているものもあって、それは「舟肘木」と言います。いずれにせよ、神社やお寺といった日本の伝統建築に見られる大斗肘木がここにあるわけです。



1. 日本橋高島屋の外観、柱と梁の接合部分 [提供：藤森照信]

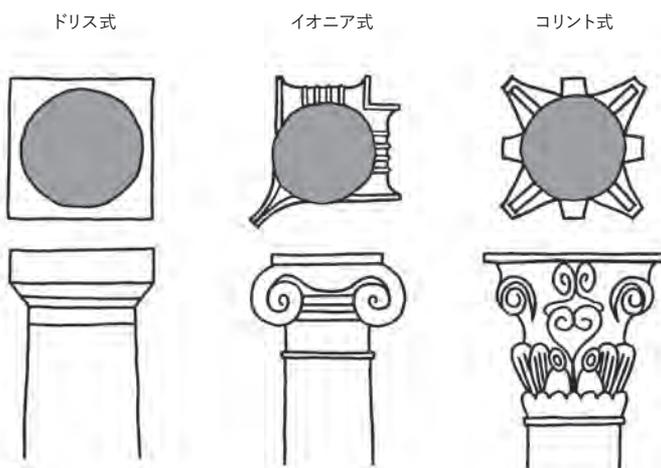
2. 舟肘木と大斗肘木 [作成：flick studio]

次に内観です。まずは先ほどと同じく柱と梁の接合部分を見ます。ここでもう一つ注意してほしいのは、柱が角柱だという点です。角を大きく面取りした角柱で、肘木が出ていて、上に梁が載っています。この写真を見るとわかりますが、上から見ると十字形をしています。これは大斗肘木ではない。「斗」というのは梁の下に来る小さい受け皿みたいなものので、マスとも読みます。ただ、写真を見ていただくとわかるように、梁を肘木だけで受けている。つまり舟肘木のかたちを取っているんです。



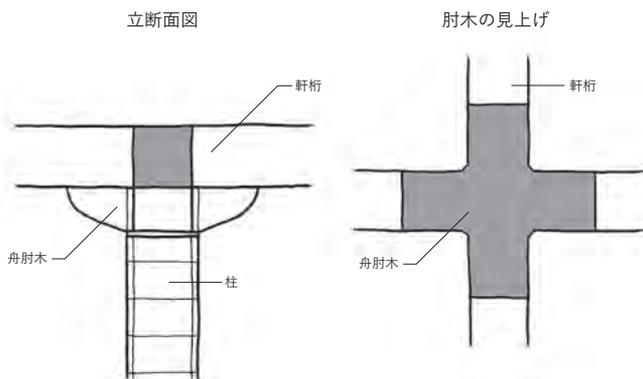
日本橋高島屋の内観 [提供：藤森照信]

ヨーロッパでは、柱の上で梁を受けるものをキャピタルと言いますが、キャピタルはヨーロッパの場合も、重要なものなのでいろいろなルールがありまして、日本橋高島屋のようなキャピタルには絶対ないんです。ヨーロッパの場合、基本的には丸柱ですが、そこへ十字状に梁が載ります。キャピタルで一番基本的なのは、ドリス式です。下から見上げるとキャピタルが正方形の形をしていて、直行する梁に対して斜めに角が出ています。コリント式はあざみの葉っぱがモチーフになっていて、これも下から見上げると、放射状にぼこぼこ突起が出てきます。もう一つはイオニア式といって、渦巻き状の装飾がつくんですが、これも梁の交点から斜めに出てくる。つまりどんな場合でも、放射状か斜めに出てくるんです。



ヨーロッパのキャピタル [作図：flick studio]

ところが大斗肘木は、直交する梁と重なるように出ます。これはヨーロッパのキャピタルにはない使い方です。そういう使い方が高島屋で実践されているということに気がついて、はてと思ったんですね。中国にはこういうやり方は無いんです。なぜかという、中国には古いものが残っていないんです。一番古くて法隆寺より百年くらい後の建築が一軒あるだけ。鎌倉時代に日本人が宋の建築を日本に取り入れたということが記録からわかっていますが、どういうものを宋から取り入れたのかを確かめに中国へ行っても、何もありません。元の建築が若干あるくらいで、宋の建築はもうほとんどない。ということ、伊東忠太は調べて知っていたわけです。じゃあこれは中国にはない、日本独自の斗肘木あるいは肘木なのか？ でもわざわざコンペの最初の二行目くらいに、東洋趣味を旨として現代的なものをつくりなさいと書いてあった建物なので、おそらく日本的なものではないでしょう。僕は世界中のいろいろな建物を見てきましたが、実はこれはインドにしかないものです。



日本橋高島屋の柱・梁接合部 [作成：flick studio]

インドに〈アジャンター遺跡〉という場所があります。建築らしい仏教遺跡というのは、インドに行ってもここにしかない。あとは巨大な仏像や、あるいはお釈迦様のストゥーパというお墓くらいです。なぜかという、アショカ王がインドを統一して仏教国にするんですけど、その後王が亡くなると伝統は廃れて、そのうちイスラム教徒に破壊され、その後ヒンズー教が広がると仏教建築は全部壊されてしまったんです。唯一壊されなかったのが、人があまり行かない谷間の崖に掘られていた石窟寺院。それがアジャンターの遺跡です。だからインドに行って、古い仏教遺跡・仏教建築を見ようとしたらアジャンターに行くしかないんですね。伊東忠太もアジャンター遺跡を見に行っています。インドを見た上で、仏教の原点はインドにあると言ってつくったのが〈築地本願寺〉です。

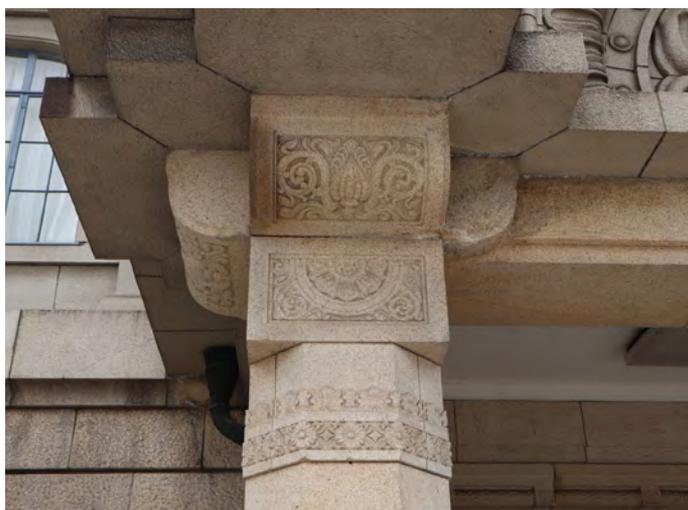


伊東忠太《築地本願寺》1934年、東京都中央区

大胆な人だと思いますね、これでよく信徒が納得しました（笑）。実は信徒が納得する理由が二つあって、一つは大谷光瑞という当時の本願寺のトップの人が、伊東忠太のようにやや妄想的な人だったこと。大アジア主義というのを一生懸命唱えて、中国の敦煌へ調査隊を派遣しました。そこからアジアの仏教をインドまでずっと調べたんですよ。彼の下の人たちがビルマの辺りを調べていると、山のなかで伊東忠太に会うんです。大谷側は日本最大の仏教宗派をバックにした、しっかりとした探検隊を組んで行っていた。そこで、現地のお供を連れてロバに乗ってぼこぼこ歩いている一人の学者に出会ったのですが、それが伊東忠太でした。お前は何をしているんだと尋ねたら「インドまで行って建築を調べる。その後はギリシャまで行く」と言う。伊東は三年間か

けてギリシャまで歩きます。法隆寺がギリシャ神殿と兄弟であることを証明しようとしていたんです。そうして、彼が日本人の建築家として初めてアジャンターを見るわけです。そこで見たお寺は、柱と梁の取り合い部分もヨーロッパのスタイルとは関係のない、ヨーロッパのアーチよりもっと古いものでした。

そのアジャンター寺院の柱の相当正確な写しが、築地本願寺の柱です。角柱で、柱頭がヨーロッパのオーダー（古典主義の柱梁様式）とは違う、純粋なアジャンター式です。日本橋高島屋ができるのと同時期に、伊東忠太は築地本願寺でこのインドスタイルを実現しているわけです。



築地本願寺の柱頭 [提供：藤森照信]

もう一つ、インド風の建築が築地本願寺に先行してあります。武田五一が1916（大正5）年につくった〈山口県庁舎（現、山口県政資料館）〉です。

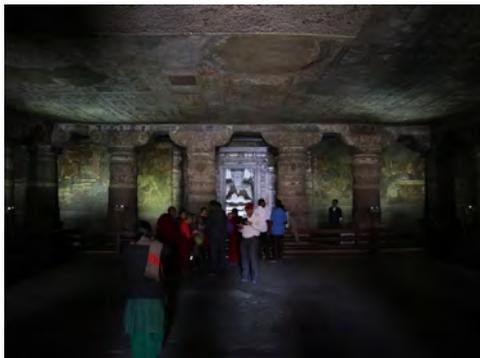
柱は角柱です。八角柱で、横に肘木が出ています。これはインドのアジャンター寺院のやり方です。非常に面白いんですけど、武田五一はこれがインド風だとは言いません。おそらく言ってしまうと、なぜそうしたんだと問われるんですね。そうすると答えようがない。好きだから、では答えにならないから（笑）。実は、伊東忠太の影響を一番受けていたのが武田五一だったんです。伊東が法隆寺の調査をやりますよね。一人じゃできないので、学生を連れて行くわけです。その時に一緒に連れて行かれたのが武田。彼は非常に面白い人で、先生が法隆寺を発見するわけですよ。じゃあ自分もやっぱり伝統を調べてみようというわけで、茶室を調べるわけです。そして茶室論、日本の茶室について大論文を書きました。茶室という言葉は武田五一が建築界に広めた言葉です。それまでは囲いとか数寄屋と言われていました。武田が近代語として茶室という言葉が建築界に広め、そこから我々が今理解している「茶室」が始まったわけです。関西ではアールヌーヴォーを最初につくった人、西洋館を数多くつくった人として名高いんですけども、彼はずっと日本の伝統に関心を持っていて、茶室も発見しますし、実際にお寺もつくっています。彼は法隆寺の改修工事で現場監督までやったことがあります。棟の高さがちょっと低いと、修理してくれ、もうちょっと上げてくれと言ったあと、倒れて亡くなったと言われていました。法隆寺の門の一つは武田が設計しています。彼はずっと伝統に興味があった方なんです。そういった背景もあって、山口でインド風の建築をつくるわけです。



1. 武田五一（共同設計：妻木頼黄・大熊喜邦）〈山口県庁舎（現山口県政資料館）〉1916年、山口県山口市 [提供：藤森照信]

2. 山口県庁舎の柱頭

アジャンター寺院の写真を見ると、ここでも八角柱の上から肘木が横に伸びています。アジャンターの柱の肘木には仏様の絵が彫刻してあります。僕はこれが日本橋高島屋の柱のキャピタルではないかと思ったわけです。つまり、コンペに記載された東洋趣味という言葉に込めていたのは、インドのことでないでしょうか。審査員のパワーバランスは伊東忠太が一番、次が武田五一なんです。伊東と武田が相談すれば、佐藤功一はまあいいかと言わざるを得ない。実は二人は密かに、ずっとインドへの関心をもっていたんですけれども、武田は山口県庁舎でその思いを露わにします。そして伊東は築地の本願寺でインド趣味を露わにする。これとほぼ同時期に行われた日本橋高島屋のコンペで、「日本趣味」ではなく「東洋趣味」という言葉が書かれていたということに、一連のつながりを感じています。



アジャンター石窟寺院

## 鼎談＝藤森照信×陣内秀信×松隈洋

### 歴史のまちと建物の未来

## 日本橋のもっているポテンシャル

**松隈** | まさかインドまで旅をするお話が出てくるとは思いませんでした(笑)。建物ひとつ残っているだけでここまでいろんなお話が聞けるんですね。それを今日は実感しました。高島屋のコンペに関連してちょっと余談を申し上げますと、すごく面白いのが、この次の年の1931(昭和6)年に、ほとんど同じ顔ぶれの審査員たちが、東京帝室博物館のコンペで、同じく「東洋趣味を基調とする日本的なもの」という様式のテーマを掲げたことです。僕自身が調べてみてわかったのですが、東京帝室博物館のコンペが渡辺仁案に決まった後、宮内省で実施設計を進めるなかで、コンペ案をどうやって実現するか議論を伊東忠太や武田五一らが盛んにやるわけです。その議事録が全部残っています。それを読んでみると、国を背負った国家的プロジェクトの建築が実現の難しさをもつ一方で、高島屋という民間の百貨店だからこそ、新しい日本独自の様式を試みてみようという共通の意志さえあれば比較的容易に実現できるんだな、と思いました。もしかしたら、伊東と武田が高島屋ならやれるぞ、だからインドで行こうぜ、みたいな話をしていただけたのかもしれない。国の施設ではできない。でも伊東も築地本願寺ではできたし、今度の高島屋ならやれるよねっていう(笑)。そして、そんな審査員を前に、高橋貞太郎は何をやりようとしたんだろう、そんな想像を膨らませる楽しみ方を教えていただいたような気がします。

陣内さんから藤森さんの地価の話に繋がっていったんですけど、歴史のコンテキストが変わって行くなかで、場所がもっているポテンシャルが上がったり下がったりしながら、町が変わる様子が立体的に見えてきて面白いと思いました。高島屋が現在までこのように残っていると、ひとつの定点観測点みたいになっているんですね。今後も、東京は独特なポテンシャルを持った都市として注目されていくと思いますが、陣内さんは、この日本橋周辺や東京という都市について、どのような展望や期待をお持ちですか？

**陣内** | 日本橋周辺に集まってくる人たちの属性や世代は近頃、随分変わりましたよね。日本橋って、郊外の住宅地から電車でわざわざ買い物に来るといった人たちをターゲットにせずと成り立っていました。憧れの象徴が銀座に変化していったというのもあるかもしれないけれど、それ以外の目的で来るっていうことはまずなくなっていたわけですよ。ギャラリーがあるわけでもなく、映画館があるわけでもない。劇場は三越劇場があるかもしれないけれど、丸善に洋書を買いくるとか、買い物以外は機能、用途、役割が限定されています。銀座は銀座でものすごくがんばって地元の老舗、旦那衆が立ち上がって、松坂屋と森ビルが組んで考えた180mの高層ビルの提案にストップをかけました。それが成功した後、建築の計画に対し、高さを56mにおさえつつ自分たちの思いを建築家に伝えながら設計してもらって、割と面白いまちづくりをしています。ただあそこもブランドショップだけが表通りに入って、やっぱりみんな危機感を感じているんですよ。まちをどうしたらいいかは、難しい問題。銀座はまだ裏があるから、

路地も含めて裏通り、横通り、そこに多様性があったいいんですけど、日本橋は三井不動産の人たちの話を聞いていると、ちょっと前までは裏まで大きく開発して、高いビルにしちゃおうっていうイメージがあったみたいですね。今は、裏の神社を移転して、小道を活かし、回遊性を維持していこうとしているみたいです。それと、コレド室町の新たな建築のなかに和風の老舗がみんな入ってきましたね。シネコンが入ったりギャラリーが入ったり、単にデパートで買い物するだけじゃなくて、オフィスで働いている人もいます。裏通りにも小さいお店がまだ生きています。またなんと言っても魚河岸があった土地なので、寿司屋や魚料理屋があったりとか、やっぱり歴史がもたらしたソフトと空間の小道がまた再生されているんですよね。神社もうまく生かしたし、近隣のマンションに住む若いファミリーがシネコンも見に来るということで夜も遅くまでやる。そういう雰囲気ガストリートに出てくるといいですね。

京橋の裏にもすごい画廊があったり骨董商があったりいいんですね。そこに明治屋がうまく保存と再開発をやったので少し元気になっている。だから本当は、新橋ステーションから日本橋まで続く連続性が生まれるといいんです。都市計画家の伊藤滋先生たちが東京に路面電車を復活、導入することを提案をされていると思いますけど、ここはちょうどいいスケールなんですよ。思い切った発想でいくと、ポテンシャル高く、しかも個性と多様性が連なる表通りができるんじゃないかと思います。今神田の西口がまた再開発しようとしているんですね。するとあそこは中央通りのすぐ裏なのでみんな繋がります。社会学者の吉見俊哉さんが文化資源の宝庫と言っている上野、根津そして秋葉原周辺から新橋まで全部繋がると都心が勢いを増してくる。まちに生活感がはじめたのがいいですね。働いている人たちの意識も変わってきていると思うんですよ。OLが増えたことで良いお店も増えて、アフターファイブも楽しめる。そういう空間がだんだん根付いてきているんじゃないかと思います。だから、高島屋の保存再開発が大きな枠組みでできたことは、そのバネになるんじゃないかなと思います。ただもっとコンテンツを面白くしていかないといけませんね。ギャラリーやアーケードも、まだまだ路上の賑わいが無い。だから路上に店を出せるような、そういう都市計画上の制度も変えながらやっていくと人が溢れ出てくるんじゃないかなと思うんですけれどね。



## 建物の見方が変わってゆく

**松隈** | 先ほど、展示室で藤森さんが言われていたように、今回、たまたま奇跡的に高橋貞太郎の描いた設計原図が、私の大学の美術工芸資料館に残っていて、初公開できたんですが、これらの図面は相当貴重なものですよ。

**藤森** | 珍しいですよ、日本の建築界ってちゃんとした仕事をした人は必ず誰かがちゃんと調べるし、一応色々やっているんですけど、それが高橋貞太郎については無いんですよ。

**松隈** | 本当に高島屋の建物がこうして大切に使われて残り、重要文化財になって、今日みたいな会を迎えたことで、初めて高橋の仕事の一部に触れられたという感じがします。さきほど藤森さんが言われたように、高島屋が後発で東京に打って出たこと、いろんな人の奇跡的なつながりの中でできたこと、インドから来たデザインが含まれていることなどがわかりましたから、このお話はぜひ公開されていくといいなと思います。

それから4階の史料館にいま展示している日本橋高島屋の模型ですが、あれは1965（昭和40）年に増築全体が完成した時に制作された貴重な石膏模型です。その模型に名盤が貼ってありますが、その位置が中央通り側ではなくて、脇道の南側に貼ってあるんですね。これには村野藤吾の、こっちが正面だと言いたい意思を感じますね。いまその南側の道には桜の並木ができています。あそこを人が歩くようになって初めて、高島屋がこういう面白い構成の建物だったんだということが目に入りはじめた感じがします。

**藤森** | 私はよく高島屋南側の桜並木は通るんですけど、今日久しぶりに歩いて、あれだって幹の直径は30cmくらいの桜だから桜の並木としては大して古いものじゃないんだけど、みんながあそこを見てうわーって感動しててね。あのくらいの努力でも、相当大きな効果があるんだなと思いました。建物への接し方、見方も変わる。都心では皇居のまわりを除くと桜並木ってあそこだけですよ。